

学位論文名： 近世越後における文人研究  
—中国古典の受容を中心に—

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏名 CHENG Jianmin

本論文は、日本近世における中国古典の「中央」から「地方」への伝播の実態と、地方における中国古典の受容の詳細について、越後ゆかりの代表的な文人に着目して考察するものである。全体の構成は以下の通りである。

序章

第一章 来越の大儒—亀田鵬斎

はじめに

第一節 近世来越文人の概観

第二節 亀田鵬斎の北越來遊

おわりに

第二章 隠逸の詩僧—良寛

はじめに

第一節 良寛の文芸の基礎

第二節 良寛詩における中国古典の受容

第三節 中日比較視点からみる良寛詩における隠逸思想

おわりに

第三章 雪国の文人—鈴木牧之

はじめに

第一節 牧之の文芸の基礎

第二節 牧之画作における中国古典の受容

第三節 『北越雪譜』における中国古典の受容

おわりに

終章

第一章では、まず近世来越文人の諸相を時代順に追究し、元禄（1680～1709）から安永・天明期まで来越者の多くが俳人であったのに対して、天明期（1781～1789）以降、寛政期にかけては漢詩人や画家が主流であったことを明らかにした。次に、数多くいる来越文人の中で、江戸の儒学者・亀田鵬斎を代表人物として取り上げてみた。彼の来越における文芸活動を巡り、中央文化の地方に対する普及の一端を明らかにした。

第二章では、中央へ学びに赴き、のち帰郷した儒学者が開いた漢学塾で教育を受け、また自ら諸国遊歴を通して知識を習得した越後人の中国古典の受容について、当地の代表的な文人・良寛の漢詩作品を巡って分析を行った。まず第一節において、良寛の文芸の基礎を追究した。収集した諸文献の解読によると、良寛の漢学の知識は、主に少年時代に通った大森子陽塾や壮年期に修行した円通寺において習得したと推知される。続く第二節では、先行研究を参照しながら、良寛詩における中国古典の影響を具体的に考察した。さらに第三節では、良寛詩における中国古典の受容に留まらず、中日思想の比較

の視点からその詩作における隠逸思想を解明した。

第三章では、越後人の中国古典の受容について、良寛と並ぶもうひとりの雪国の文人・鈴木牧之を取り上げ、文芸作品の分析を行った。まず第一節では、牧之の文芸の基礎的内容を追究した。彼自筆の『夜職草』や『永世記録集』によれば、その漢文の素養は幼少時代に通っていた大運寺で習得したものである。さらに寺子屋を出てから与板徳昌寺の住職・虎斑に作詩の基本を学び、漢文の知識向上に一層精進した。加えて独学ののち、来遊画家の狩野梅笑に師事したことで、山水や花鳥図にも巧みさを示した。次に第二節では、牧之の「水鳥之図」「鍾馗之図」、三つの「山水図」、合計五作を考察することで、彼の画作における中国文芸の影響に論述した。第三節では、牧之の代表著作『北越雪譜』における中国古典の受容を具体的に指摘した。

以上のように本論文では、亀田鵬斎の北越來遊を考察することを通し、日本近世における中国古典の「中央」から「地方」への伝播ルート的一端を明らかにした。さらに、越後文人における中国古典の受容の詳細について、良寛と鈴木牧之の文芸作品に即して具体的に考察を試みた。その結果、幕府の文教政策の影響を受け、江戸時代では漢学が地方の知識人たちにまで浸透していった一方、日本独自の嗜好による学問として発展した傾向が、第二章の良寛詩作における隠逸思想の分析からもうかがえた。

漢学の受容にとどまらず、江戸時代の日本ではどのように中国の学問を取捨したのか、またそれを取捨したうえで、如何なる新しい文化を生み出したのかについて、引き続き今後の研究課題として取り上げてみたい。